# 『現代女性とキャリア』第16号によせて

現代女性キャリア研究所所長
永井　暁子

冒頭では、昨年12月に開催したシンポジウム「女性が働く意味を問う」での基調講演やその後のパネルディスカッションなどを取り上げています。共働き、女性が働くことが当たり前の時代になりましたが、女性の労働者は非正規労働者が多くを占めたままです。妻が所得を増やし家庭内の平等な分業を目指している夫婦がいる一方で、それをできない状況にある夫婦、それを望まない夫婦など内実はかなり多様です。昨年のシンポジウムでは、あらためて女性の働きかたを振りかえり、女性が働くことの意味を多面的に問い直しました。

戦後の日本経済の成長期を経て、専業主婦が大衆化した時代が発見されて以降、同時期に女性が働くことが当たり前と考えられていた地域があったことが忘れられがちです。基調講演では、女性労働研究の第一人者である木本喜美子先生にご登壇いただき、産業構造が変わり専業主婦が半数以上を占めた時代にあっても、脈々と流れていた共働き文化について論じていただきました。パネリストとして、「マタニティ・ハラスメント」という言葉を用いて社会に問題提起した杉浦浩美先生が時代の変化のなかでの女性の労働観の推移を、上村泰裕先生は働くことの意味と保護の視点から、永井は女性の働きかたと家計の構造との関係という視点から女性の働く意味を論じています。

女性が働く意味とのつながりが深いテーマである年金について、昨年度第1回の研究会でご報告いただいた中尾友紀先生には制度からみた女性の稼得役割に関する社会的な位置づけについてご寄稿いただきました。また、所内の研究活動の一環であるリカレント教育課程修了者のライフキャリア形成促進政策に関する研究について、尾中文哉先生と前所長の坂本清恵先生、研究員3名による報告書をコンパクトにまとめて掲載しております。

住澤博紀名誉教授には、前号からスタートした学生へのメッセージのコーナーである「女性とキャリアの雑学」でご執筆いただきました。書評などとともに学生や若者向けのコーナーも継続していきたいと考えています。

今号では、掲載可となった投稿論文がなかったのは残念でしたが、第4号から学外からの投稿論文の受付・査読・掲載しております。さらには、本学内でさまざまに実施されている女性のキャリア支援や女性についての研究・教育の総合的な発信の場となるよう、他部署にあっては分かりにくい活動内容を「動向」としてまとめています。今後も学内外のキャリア支援についての動向についてお知らせしていきたいと思います。

これからも本誌をよろしくお願いいたします。